

絹本墨書しゅうごう「周焯筆墨書」保存修復報告

上江洲安亨^{*1}・関地久治^{*2}・箭木康一郎^{*3}

1 はじめに

本作品は、(財)海洋博覧会記念公園管理財団首里城公園管理センター所蔵「周焯筆墨書」である。作品は一枚の絹帛に7列の墨字が書かれ、印章として本紙右上部に白文方印が一つ、左下部には白文方印及び朱文方印が其々一つずつ押されている。修復前は折れや虫害欠失による本紙の損傷が著しかった為、平成21年8月4日から平成22年3月26日、(有)墨仙堂で修復を行った。

2 作品構造及び寸法

修復前後の構造及び寸法を以下に記す。

1) 本紙

- (1) 基底材及び画材 : 絹本墨書
- (2) 本紙料絹の特質 : 五枚縹子
 - 経280本 (3.03cmの間)
 - 緯120越 (3.03cmの間)
- (3) 本紙料絹の枚数 : 1枚
- (4) 寸法 : 修復前 丈94.4cm 幅43.6cm
: 修復後 丈95.2cm 幅44.0cm

2) 装丁

修復前

- (1) 装丁 : 掛幅装
- (2) 表具寸法 : 丈172.1cm 幅54.8cm
- (3) 表装形式 : 袋明朝
- (4) 裏打ち紙 : 3層
 - 肌裏 : 楮紙
 - 増裏 : 楮紙
 - 総裏 : 楮紙
- (5) 表装裂 一文字 : 白地菊桐文緞子
 - 総縁 : 萌黄地牡丹唐草文緞子
 - 明朝 : 白茶地裂
- (6) 軸首 : 古色付象牙頭切軸
- (7) 収納箱 : 印籠箱

*1 (財)海洋博覧会記念公園管理財団 首里城公園管理センター 事業課 調査展示係 係長

*2 有限会社 墨仙堂

*3 有限会社 墨仙堂

修復後

- (1)装 丁：掛幅装
- (2)表具寸法：丈 173.3cm 幅 44.0cm
- (3)表装形式：本袋表具
- (4)裏打ち紙：4層
 - 肌裏：楮紙(新調)
 - 増裏：美栖紙(新調)
 - 中裏：美栖紙(新調)
 - 総裏：宇陀紙(新調)
- (5)表装裂 一文字：薄浅葱地紗綾形円寿文緞子(新調)
 - 総縁：白地雲に鳳凰文緞子(新調)
- (6)軸首：黒檀撥軸(新調)
- (7)収納箱：桐太巻添軸(新調)
 - ：桐印籠箱(新調)

3 修復前の損傷状況

- 1) 本紙に折れが多数生じていた。
 - 本紙全体に多数の折れが生じていた。又、本紙の折れ山が擦れ、白くなっていた。
- 2) 本紙料絹に虫害欠失が生じていた。
 - 虫害欠失部分から裏打ち紙が白く露出し、作品鑑賞の妨げとなっていた。
- 3) 本紙に染み・汚れが生じていた。
 - 本紙中央に染みが生じていた。又、本紙全体に汚れが付着していた。
- 4) 裏打ち紙に糊浮きが生じていた。
 - 本紙中央部に施された裏打ち紙に、多数の糊浮きが確認出来た。
- 5) 軸が損傷していた。
 - 軸には割れや欠失が確認出来た。

4 過去の修理状況

- 1) 軸と軸木を接着剤で止めた痕跡が見られた。
 - 過去に外れた軸が再び取り付けられていた。又、軸と軸木の取り付けに用いられた接着剤が表装裂に付着していた。

5 修復方針及び概要

- 1) 実施の作業及び方針の決定・変更等は、首里城公園管理センターの本件担当者との協議・監督の下進める。
- 2) 掛幅装を解体し、本紙裏打ち紙除去後、新たに裏打ちを施し、元の掛幅装に装丁する。
 - 新たに施す裏打ちは「肌裏紙」「増裏紙」「中裏紙」「総裏紙」の計4層とし、裏打ち紙として下記の物を使用した。

肌裏紙 楮紙(薄美濃紙長谷川和紙工房製)

増・中裏紙 美栖紙（白雪昆布尊男製）

総裏紙 宇陀紙（福虎福西弘行製）

3) 表装形式について

表装形式については、首里城公園管理センターの本件担当者と協議し、修復前の「袋明朝」から「本袋表具」に変更した。

4) 各作業の接着剤として小麦粉澱粉糊（新糊）を使用する。

各作業の接着には、伝統的に使用されている小麦粉澱粉糊（新糊）と新糊を複数年瓶で寝かせた古糊を使用した。小麦粉澱粉糊は、可逆性も高く、将来の再修理の際にも裏打ち紙等の除去を容易にすることが出来る。

小麦粉澱粉（中村糊店 製）

5) 本紙のクリーニングを行う。

クリーニングには濾過水と吸水紙を使用した。加湿した本紙に吸水紙を置き、本紙中の水分に汚れ等が溶け出した所を吸水紙の毛細管現象を利用することにより、吸水紙に移し、汚れ・染みを除去した。

6) 剥落止めを行う。

剥落止めには膠水溶液を用いた。使用する膠の種類、濃度は剥落の度合い、作業の進行状況に合わせ使い分けた。

膠（TSS粒膠 新田ゼラチン）

（播州膠放光堂）

7) 表装裂を新調する。

新調する表装裂に関しては、首里城公園管理センターの本件担当者と協議し、下記の表装裂を選定した。

一文字 薄浅葱地紗綾形円寿文緞子

総縁 白地雲に鳳凰文緞子

8) 本紙の欠失箇所に適する補修絹で繕いを施す。

補修絹には本紙に類似するものを選定した。又、本紙料絹の地色に近い色調に合わせ、合成染料で染色した。

9) 本紙の折れが生じている箇所、及び今後折れが生じると思われる箇所に折れ伏せを入れる。

10) 表具裏面の書付とラベル及び印章について。

修復前の上巻に書かれた書付及び総裏紙に押された印章については、首里城公園管理センターの本件担当者と協議し、修復前と同じ位置に貼り付ける事とした。書付と印章に剥落止めを行った後、其々を新調した上巻及び総裏紙に貼り付けた。

ラベルに関しては、テストの結果、水溶性のインクが使用されている事が分かった。再度作品にラベルを貼り付ける事で、インクの滲みが作品に移る可能性があった為、別保存する事とした。

11) 軸・軸木・八双・掛け紐・白絹帛袱紗・桐太巻添軸桐印籠箱・箱帙を新調する。

軸に関しては、首里城公園管理センターの本件担当者と協議し、象牙頭切軸から黒檀撥軸に変更した。

12) 必要な箇所に補彩を施す。

補彩に関しては、補絹を施した箇所のみ行った。又、補彩の色調については、首里城公園管理センターの本件担当者と協議し、決定した。補彩に使用する画材は、顔料を膠で溶いたもの或いは、棒絵具（放光堂）を使用した。

6 修復工程

- 1) 修復前に本紙の状態を調査し、写真撮影を行った。
- 2) 作品に付着する埃を、刷毛等を用いて払った。
- 3) エチルアルコールを噴霧して黴の消毒を行った。
- 4) 膠水溶液を用い、剥落止めを行った。
- 5) 掛け紐・軸木・八双を取り、掛幅装を解体した。
- 6) 表具裏面より加湿し、上巻き・総裏紙・増裏紙を除去した。
- 7) 付け廻し部に適度な湿りを与え、本紙より表装裂を捲り取った。
- 8) 表打ちした本紙を透過台の上に貼り込み、本紙に噴霧器で濾過水を与え加湿した。その後吸水紙を置き、汚れを本紙の裏面より吸出しクリーニングを施した。
- 9) 濾過水を使用し、表打ちを施した。表打ちは、次作業に行う裏打ち紙の除去作業時に本紙表面を保護するために行う。養生紙を刷毛で、本紙表面に強度を上げるため二層貼り付けた。養生紙にはレーヨン紙を用いた。
- 10) 本紙に打たれた肌裏紙を捲り取った。
- 11) 小麦粉澱粉糊（新糊）を用い、楮紙で本紙の肌裏を打った。
- 12) 新調した表装裂に楮紙で肌裏を打った。糊は新糊を用いた。
- 13) 本紙に美栖紙使用し増裏を打った。糊は古糊を使用した。裏打ち後、仮張りを施した。
- 14) 本紙欠失箇所に適する補修絹を表から施した。
- 15) 本紙の折れが生じている箇所、及び今後明らかに生ずると思われる箇所に折れ伏せを入れた。折れ伏せ紙は楮紙を用い、糊は新糊を使用した。
- 16) 表装裂に美栖紙を使用し増裏を打った。糊は古糊を使用した。裏打ち後、仮張りを施した。
- 17) 本紙と表装裂を「本袋表具」に付け廻した。
- 18) 美栖紙で中裏を打った。糊は古糊を使用した。裏打ち後仮張りを施した。
- 19) 宇陀紙で総裏を打った。糊は古糊を用い、裏打ち後仮張りを施した。
- 20) 必要な補修箇所に補彩を施した。
- 21) 八双・軸木・掛け紐・桐太巻添軸・桐印籠箱等を新調した。
- 22) 箱帙を製作した。
- 23) 軸を新調し、軸木に取り付けた。
- 24) 十分に乾燥させた後、表具に仕上げた。
- 25) 完成した表具を桐太巻添軸に巻き、新調した白帛袱紗に包んだ後、桐印籠箱に収納した。
- 26) 修復後の記録写真撮影及び報告書を作成した。

7 使用諸資材及びその他

1) 水

〈濾過水〉（濾過水器 オルガノ株式会社PFカーボンカートリッジ、ミクロポアーシリーズNタイプ）

〈イオン交換水〉（濾過水器 オルガノ株式会社 カートリッジ純水機 G-10C形）

濾過水・イオン交換水は、水道水（京都市水道局）を元水としフィルターで濾過した物を使用した。イオン交換水で作製した溶液は可能な限り純粋な溶液であり、反応も調節し易いため使用した。また通

常の作業では水道水に含まれる塩素・鉄等の不純物を除去する事により、作品に悪影響を残さない濾過水を使用した。

2) 小麦粉澱粉糊 (小麦粉澱粉 中村糊店 京都府京都市下京区富小路五条下がる)

〈新糊〉 新糊はグルテンを除去した小麦粉の澱粉質を原材料に使用し作成した。水 3 : 小麦粉澱粉 1 の割合で約 30分煮溶かした物を元糊とし、各作業に応じた希釈率で使用した。

〈古糊〉 古糊は伝統的に増裏・総裏紙の接着に用いられてきた。新糊を複数年寝かせることにより、発生する黴や微生物によって醗酵が進み、古糊が出来上がる。古糊は接着力が弱い。それを補う工程として、「打ち刷毛」という特殊な表具用刷毛を使用し、裏打ち紙と料紙の微弱な接着力を補う作業を必要とする。

3) 粒膠<TSS粒膠> (新田ゼラチン 大阪市)

4) 布海苔<紀州産> (えびす屋 京都市)

5) 楮紙

〈薄美濃紙〉 (長谷川和紙工房 美濃市) 原材料はクワ科の楮。中でも国内産那須楮白皮を使用した手漉き和紙。薄く強韌で長期の保存に耐える。肌裏打ちに使用。

〈美栖紙〉 (白雪 昆布尊男 奈良県吉野郡) 原材料はクワ科の楮。紙漉きの際、胡粉(炭酸カルシウム)や白土を添加する。伝統的に表具の裏打ち紙として使われてきている。薄く、軟らかく、作品に適度な厚みと柔軟性を与える。奈良県指定伝統工芸品。増裏・中裏打ち・上巻き裂の裏打ちに使用。

6) 総裏紙

〈字陀紙〉 (福虎福西弘行 奈良県吉野郡) 原材料はクワ科の楮。紙漉きの際、地元特産の白土(カオリナイト)を添加する表具用手漉き和紙。美栖紙に比べやや厚いが、風合い・質感共に軟らかさがある。古糊と合わせて使用する。総裏打ちに使用。

7) 保存箱<桐太巻添軸桐印籠箱> (福井工房製 京都市)

8 結び

1756 (乾隆 21) 年、尚穆王の冊封副使として正使の全魁とともに来琉した周煌は、滞在中に多くの詩や書を残した。本作品は、過去から現在に伝えられている周煌筆の墨書である。

修復前の作品は表装形式として「袋明朝」に仕立てられ、本紙・表装裂に肌裏紙・増裏紙・総裏紙の合計 3 層の裏打ちが施されていた。本紙に関しては、経糸・緯糸が 5 本以上で 1 完全組織の作られた縹子織で、織密度が高く 30.3cm の間に経 280 本、緯 120 越の絹糸で織られた絹帛であった。又、表面は平滑で光沢があった。この事から、本紙料絹は練糸を縹子織にした統本(こうほん)であった。統本に用いられる絵絹は統(ぬめ)と呼ばれ、地合は薄く、平滑で光沢に富み、柔軟性のある上質の絹帛である。明国より伝来し、天和年間(1681—1684)に京都の西陣で初めて製出された。

修復前の作品は本紙全体に多数の折れが生じていた。更に、本紙中央部に施された裏打ち紙に多数の糊浮きが生じており、新たな折れを誘発する要因となっていた。折れは掛幅装に生じる宿命的な損傷であり、折れの生じた箇所は摩擦や屈折を繰り返す事によって、本紙料絹が失われていく。本作品も同様に、本紙料絹の折れ山の絹が粉状化して白くなり、一部が欠失していた。又、本紙料絹に虫害欠失が多数確認出来た。特に上部の欠失が著しいが、欠失は作品の本紙料紙のみに限られ、表装裂や裏打ち紙には確認出来なかった。

以上を踏まえ、今回の修復で得た知見として、前回の修理では損傷に応じた修復の痕跡が確認出来なかつ

た事を挙げる。本紙料絹の欠失箇所には補修絹は施されておらず、本紙に折れの生じた箇所にも補強は施されていなかった。この事から、前回の修理では肌裏紙を捲り取った後、損傷箇所の補修を行わず、肌裏紙が打たれたと考えられる。結果として、表装形式、或いは表装裂の変更が行われたのみであった。依然として折れによる損傷は進行し、欠失箇所から露出した白い肌裏紙は鑑賞の妨げになっていた。

今回の修復では表装形式を「袋明朝」から「本袋表具」に変更し、表装裂・軸首・桐太巻添軸・桐印籠箱を新調した。又、作品を解体し、本紙の裏打ち紙を捲り取った後、本紙料絹・表装裂に肌裏紙・増裏紙・中裏紙・総裏紙の合計4層の裏打ち紙を施した。更に、本紙に生じた折れの箇所、及び今後折れが生じると思われる箇所を透過光と斜光を用いて本紙表裏面より特定した後、細く裁ち切った楮紙を肌裏打ち後の本紙裏面より貼り付け補強した。欠失箇所には本紙料絹の調査結果を元に類似の絹帛を選定し、補修絹を繕った。

修復後の作品は本紙に生じた折れや虫害欠失を補修した事で、今後生じると考えられる折れや損傷を引き起こす要因を解消する事が出来た。又、作品を桐太巻添軸に巻く事で、折れの原因となる本紙に懸かる負担を軽減し、長期的な保存に堪える事が可能となった。

今回の修復によって、周焯が琉球の地で記した書を、貴重な文化財として長く後世に伝える事が出来ると確信している。